

《投稿論文》

社会学的思考の解放に向けて

周藤 真也

1. はじめに

本論考は、差別研究それ自体が、「差別すること」と結びつく可能性について考えることから始める。この可能性は、基本的に次の二つのところに存している。

第一に、実践的可能性について。差別研究が、「差別」という問題状況に対して、その解決、つまり「差別の解消（被差別者の解放）」を志向したものであるならば、それは差別する者を差別する実践と密接に絡み合うことになる。差別されているという問題状況に対する「告発」は、具体的には差別を行っている者を、「正義」の名の下に告発することであり、このことには「差別する者」を他の者から区別し排除する結果、差別に繋がる可能性が存在している⁽¹⁾。

第二に、差別研究の存在論的位置にかかわる認識論的可能性について。差別は、差別研究それ自体が存在する限り、無くなってはいない。このことは、差別研究は、差別が存在することの根拠として、被差別者や差別研究を行う者に対して提示される可能性を持っていることを意味している。この可能性は、差別研究が、差別の解消を志向する際に増大する。「差別研究は自らの存在を消去するような否定的な営み」⁽²⁾でなければならないにもかかわらず、いつまでも差別研究は終焉を迎えない。差別研究を自らが行う限りにおいて、差別はなくなっていない⁽³⁾。

これに対して、差別研究は、「差別の解消」という実践的課題を一旦括弧に入れ、差別という社会的現象が、社会的にどのように構成されているのかということを、観察し分析することを行ってきた。このことは、差別の解消という実践的課題を目的とする立場からすれば、その目的に資することが期待されてのものであるのだが、差別という社会的現象の社会的構成についての研究は、しだいにそうした実践的課題から分化し、一個の独立した社会学的研究として取り組まれるようになる。

しかしながら、そうした差別という社会的現象の社会学的研究においてさえ、差別の解消という実践的課題とは、完全に切り離されたわけではなく、「差別すること」に対して決して「善悪の彼岸」に立つものではなく、「差別すること」は依然として倫理的に拒否されるべきものになっていることが明らかになるときがある。だから、差別の社会的構成の研究において、「差別の解消」という実践的課題は、消去されているというよりも、「記憶」の領野の問題になっているというべきであるだろう。

われわれは、これからある一つの論文を取り上げることを通して、この論考を進めていくことにしたい。取り上げるのは、佐藤裕氏の『「差別する側」の視点からの差別論』という1994年の論文である〔佐藤, 1994〕。この論文は、従来の差別研究を「差別される側」から差別を告発し、差別されることの不当性を訴えることによって、「差別の解消」を目指

すものであると定義し、社会的関係性の中で差別という社会的現象を捉えるものへと、差別研究の認識論的転換を図ったものとして特徴的である。それとともに、この論文は、この認識論的転換を「差別する側」から差別という社会的現象を捉えると象徴的に宣言することによって、特異なものを呼び込むことになる。すなわち、この論文でいう『差別する側』の視点からの差別論とは、どのような相互行為の中で差別という実践が行われるのかということを射程に捉えることを目指したものであって、決して「差別する者」を、あるいは「差別すること」を正当化するという意味において「差別する側」に立つことではない。それとともに、この議論は、「差別する側」の視点を主張することによって、「差別される側」というものを消去することを試みているようにも読み取ることができる。それは、あたかも世界には、「差別する側」の者しかおらず、差別される者が存在しないことによって、差別という社会的現象そのものを解体しているかのようである。

本論文は、佐藤 [1994] で示されているこの思想的可能性を、もう一度「差別される側」に引き戻すことによって、救い出すことを目的としている。それは、差別される者／差別する者をさまざまな抑圧から解放することを超えて、社会的な現象を「社会的行為」として観察し分析し、社会的な関係性の中でしか記述しようとはしない社会学的思考を解放することに繋がっていく。本論文は、このことを、差別概念を〈私〉の存在の基本原理として採択することを通して、実現していくための準備作業である。

2. 『差別する側』の視点からの差別論とは何か

佐藤裕は、『差別する側』の視点からの差別論 [佐藤, 1994] において、差別問題を「差別する側」の問題として考えることを提起した。佐藤によれば、「これまでの差別論は差別問題を『被差別』問題としてしか考えていなかったために、決定的な弱点をもっている」 [佐藤, 1994:94] するという。なぜなら、「差別される側」の視点に立つ差別論は、正当性の問題に踏み込まざるをえず、かつ差別を差別に対する告発によって定義するために、差別行為を「加害行為」としてしか認識できなくなり、「不当性の証明」をしなければならなくなるからだ。

これに対して、佐藤は、「差別する側」の視点に立つ必要性を説く。佐藤は、「差別－被差別」カテゴリーが実際にどのように用いられているのかから考えることを通して、被差別者はそのカテゴリーの存在の否定あるいは不在を特徴とする「排除カテゴリー」であると見抜く。排除カテゴリーは、「普通」、「人間」、「我々」といった漠然とした「見えない」カテゴリーによって指し示される。そうした「見えない」カテゴリーは、「差別者」による第三者、すなわち「差別者」に仕立て上げられ「差別する側」に組み込まれようとされる「共犯者」との「同化」によって形成されるという⁽⁴⁾。

こうして、佐藤は、「差別される側」の視点に立った差別論の問題点を簡潔にまとめ、そこから「差別する側」に立った差別論の理論的優位性を証明する。佐藤は、次のように言う。『差別される側』の視点に立つ限り、『差別－被差別』の関係性の中での『差別する側』のうける『抑圧』を明らかにすることはできない [佐藤, 1994:98]。つまり、佐藤が提起したのは、人々の日常的な社会的な実践の中で、差別するという実践がどのようにして達成されているのか、そして、差別者の被差別者に対する抑圧というよりも、差別者が社会のなかで実際に経験している「差別すること」へと差し向けられることになる抑圧を記述

することを目指したのである⁽⁵⁾。しかしながら、差別や排除という現象を、社会的関係性の中で捉えるという試みは、社会学的方法としては「古典的」だ。デュルケーム (Durkheim, É.) が「われわれがそれを非難するから犯罪なのである」[Durkheim, 1883=1989 (上):143] と言ったように、それが犯罪であることの根拠をその犯罪そのものの性質に求めるのではなく、集合意識を害するから犯罪となるという観点は、ベッカー (Becker, H. S.) やレマート (Lemert, E. M.) らのラベリング論に引き継がれ、犯罪や逸脱といったものが、社会的な関係性の中で構築されることを記述していくことになる。ラベリング論は、人々から「逸脱者」というラベルを貼られることの結果として、「逸脱者」が生じていく過程を検討するとともに、「逸脱者」自身の自己定義をも俎上にあげる⁽⁶⁾。

こうして考えてみると、佐藤 [1994] の議論に見られるように、差別という現象もまた、こうした社会的な関係性の中で構築されるというというのは、当然のことで、ただ差別研究が、「正当性問題」に深く関わってきたために、そのことが見えなかったに過ぎないように思われる。しかしながら、佐藤 [1994] の視点がユニークなのは、この認識論的な転換を、「差別される側」から「差別する側」への視座の転換であると定義することを通して、「差別される側」というものが議論の領域から消去されていることである。佐藤は、「従来の差別研究」が「正当性問題」と分かち難く絡み合っていることに対して、差別という現象を社会的な関係性の中で捉えるために、「差別される(者の)側」から引き離れた。しかし、そのことによって達成されてしまっているのは、当の差別研究の出発点である「差別される側」の主観における諸症状、すなわち差別される者の受ける苦しみや、不当さからくる怒りや憎しみといった感情などから差別される者の〈現実〉、すなわち「差別される側」そのものが捨象されることではないのか。あるいは、差別されるものの実在性を消去し、「差別される者」を排除し差別することにつながってはいないのか。

ここで確認しておかなければならないのは、「差別」という現象は、いったい何によって定義されるのか、ということである。佐藤 [1994] において注目されているのは、「差別される側」が不当性を訴える「告発」という社会的行為によってである。

差別という現象を、「告発」という社会的行為によって定義することは、構築主義社会問題論でいうところの「クレーム申し立て活動」[Kitsuse & Spector, 1977=1990] として定義することである。しかしながら、「差別」という現象を「クレーム申し立て活動」という「社会的行為」として定義することは、「差別」という現象を実定化する政治的運動に加担することである。「差別」という現象をそれに対する「告発」によって定義することは、差別される者が不当だと思いながらも、「告発」しないあるいは「告発」することによって自身が被ることになる不利益を考えると告発することのできない「差別」的現象が存在する可能性を排除することになり、「構築されざるものの権利」[北田, 2001] の問題を発生させる。この問題は、とりあえず「告発」という「社会的行為」を「理念型」として、「差別」という現象を象徴するものとして捉えたり、当事者が気づいていないような「差別」的な現象があるとして、それを将来における「告発」の可能性において「差別」現象であると認定しないしは定義づけることによって、回避することはできるだろう。しかしながら、「差別される側」からすれば、差別であるとクレームを申し立てても、そのクレーム自体が無効化されたりすることがあるし、実際には「告発」すなわちクレーム申し立てに至らない、

クレーム申し立て活動以前の「問題経験」⁽⁷⁾が、差別という現象にはつきまとう⁽⁸⁾。

佐藤のいう『差別する側』の視点からの差別論は、こうした「差別」という現象を実定化する運動に加担することに対して、「差別する側」へと視点を移すことによってこの問題を回避しているとみることができる。佐藤の前稿〔佐藤, 1989〕を参照するならば、「差別」という現象を「告発」という「差別される側」の行為よりも、「差別する側」の「見下し」という行為に求めていた。こうしたところには、佐藤の当時の問題関心が、一貫して「差別する側」にあったことがうかがわれる。

3. 「差別する側」と「客体化の様式」

われわれが確認してきたように、佐藤〔1994〕のいう「差別する側」の視点とは、「差別する」という現象の構成を社会的な関係性の中で記述する際に、「正当性問題」と絡み合わさった「従来の差別研究」に対して、「差別される側」から切り離して記述することを目指す認識論的転換において機能している。このことは、佐藤のいう「差別する側」というのが、「差別される側」と対称的な関係性にはなっていないことを意味している。『差別する側』の視点からの差別論を従来からの「差別される側」の視点からの差別論に対称的に論じ立てようとするならば、「差別される側」の視点による「差別論」のもつ「弱点」として指摘される「正当性問題」（差別されることが不当であること）に対して、差別することの「正当性問題」（差別することが正当であること）についての議論となるだろう。佐藤の議論は、そうした意味では「差別する側」に立つてはいないことはいうまでもない。佐藤の議論は、「差別」という現象について「差別する側」へと視点を移した「社会学的記述」によって、一瞬「善悪の彼岸」に立っているという錯覚を起こさせるのに十分であるけれども、このことによって「差別する側」の記述において、差別が倫理的に「悪」とであるという認識を保存することが可能だ⁽⁹⁾。佐藤の議論は、「差別する側」の視点に立つことによって、認識論上のレベルにおいて、「差別」現象の存在を、議論のなかに「保存」し、かつ反復させる⁽¹⁰⁾。しかし、これは差別研究が、その始源においてその解消を目的とするものであったとするならば、そのことを忘却することであるとともに、こうした記述の仕方は、いつまでもそこにその「差別」という現象を存続させることに加担することではないのか。佐藤の議論は、差別という現象の存在を所与とし、それが「悪」とであるという認識を保存することにおいて、「差別される側」の視点からの差別論と袂を分かってはいないのである。

実際のところ、佐藤が目指していたのは、「差別する」という現象の構成を社会的な関係性の中で記述することである。このことは、D・スミス〔Smith, 1989〕の「インサイダー・ソシオロジー」の概念に依拠して説明されていた。佐藤は、スミスのいう「内側から見た社会についての認識」を「社会の現実を『外側から見る』という試みを放棄し、『認識主体が現に立っているところから始める』ことを要請」〔佐藤, 1994:104〕するものとして捉える。こうした意味において、たしかに佐藤は「差別する側」の「認識主体が現に立っているところから」記述をはじめようとしている。このことは〈私〉がいかに差別問題とかかわっているのかということを反省的に記述することにおいては大いに有効となるだろう。しかしながら、佐藤の提起する記述方法は、佐藤のいう「差別される側」と照らし合わせてみるならば、それとは対称的には「差別する側」に立っていないと考えられるものであ

ったし、「差別される側」の〈現実〉を捨象することで「認識主体が現に立っているところから」から議論をはじめてはいないとも考えられるものであるのだ。

このことは結局のところ、スミスが理論化し、佐藤もそれに言及した「客体化の様式」に佐藤の議論自体がはまり込んでいく可能性を示唆している。すなわち、フェミニスト・ソシオロジーの困難として、スミスが指摘したのは、①現実の女性の経験から社会学を記述する試みを情け容赦なく無化し、そのために私たちは避けようとした当のものの見方にいつのまにか逆戻りさせられてしまうこと、その結果として、②現実世界の構造を、ジェンダーや人種や階級をすでにそこにあるものとみなすような、社会学に知られた世界として組織する、ということであった [Smith, 1989] [佐藤, 1994:103]⁽¹¹⁾。そして、こうした佐藤の議論は、現実世界の構造を「差別」がすでにそこに存在する社会学に知られた世界として組織することを通じて、「差別される側」の経験から社会学を記述する試みを無化し、「差別される側」にいる者たちが避けようとしてきた当のところのものにいつの間にか逆戻りさせられてしまう可能性をもってしまう。このことにおいて、佐藤の議論は、「差別」ということがらについて、まさにひとつの「客体化の様式」を実現してしまっていたのである⁽¹²⁾。

4. 〈私〉を世界から切断する〈生〉の基本原理解として〈差別〉

佐藤は、「客体化の様式」に対抗するオルタナティブな手段として、スミスの「インサイダー・ソシオロジー」の概念を持ち出し、社会の現実を「外側から見る」という試みを放棄し、「認識主体が現に立っているところから始める」ことを要請した。けれども、この要請は、「差別する側」に視点を移し、「差別する者」としての〈私〉が差別－被差別の関係性のなかでどのように位置づけられるのかということ、すなわち、「差別する側」がどのように社会的な相互行為の中で差別行為を行っているのかということを探求するものであることによって、被差別者の〈現実〉を外側から見るものになっていた。

ならば、そうした「客体化の様式」に対抗しつつ、「差別される側」の視点に今一度引き戻したとするならば、どのようなことになるのだろうか。そのときわれわれはもはや、「差別される側」の主張する「不当性」に根拠を置くことはできない。なぜなら、そうした議論は、佐藤の「『差別する側』の視点からの差別論」と同様に、「差別」という現象を、「不当性」の主張によってそこに保存して、反復して再現してしまうものであるからだ。あるいはまた、「差別される側」というものを社会的な関係性の中で問題とすることも採択することはできない。すなわち、「差別される側」が、「差別する側」との関係性の中で、どのように自己定義しつつ社会的な相互行為を行っているのかを、観察し、記述するということはできるだろう。しかしながら、そうした記述もまた「差別」という現象を、そこに保存して、反復する記述にほかならないのである⁽¹³⁾。

われわれが注目したいのは、佐藤 [1994] の議論が、「差別される側」へと視点を移すとき、「差別される側」というものが存在しなくなってしまう可能性である。差別研究がその出発点として、「差別の解消」ということを目的にもっていたとするならば、差別という問題状況に対する認識論的な解決の位置を佐藤の議論がもっていたことがわかる。すなわち、佐藤 [1994] によって描かれる世界が、「差別する側」のみとなるとき、「差別される側」は存在しなくなってしまう。このことによって、認識論的に差別が解消してしまう。

このことは、差別研究の前提に、差別という社会的な現象の解消という目的が（あるいは少なくともそれを目的としていたことの残滓が）存在していたことと関係してくる。もしわれわれが、「差別」問題の解消を希求するのであれば、「差別」はすでに存在していないものとして、あるいはすでに「差別」は解消してしまったものとして、未来を先取りしなければならなくなる。そのとき要請されるのが、「差異の否定」である⁽¹⁴⁾。

この論文において、われわれが提起しておきたいことは、従来の差別論が禁忌してきた、あらゆる「差異」を「差別」に含め、あらゆる「差異」を「差別」の可能性のもとで捉えることの可能性についてである⁽¹⁵⁾。もしそうした中で、「差別の否定」を考えるならば、それは世界から「差異」が消滅することになる。しかしながら、世界からの「差異」の消滅はまた、世界から〈私〉の存在が消失していくことであるのだ。それでもなお、積極的に「差異」を位置づけ、論じ直していくならば、われわれは、〈私〉を世界から切断する〈生〉の基本原理解として〈差異＝差別〉を定置していかなければならなくなるだろう⁽¹⁶⁾。そして、そこには、「差別する側」と「差別すること」の肯定が含み込まれることになる。そのとき、「差異」と「差別」とを区別しない差別論は、これまで議論されてきたあらゆる「差別」についての、そしてそうした差別現象そのものの認識論的な解体でもあるとともに、「差別」という現象は、〈私〉の成立において保存されることになる。

かつてイリガライ (Irigaray, L.) が、女には複数の性があるという意味において、「*n* 個の性」ということがらを主張した [Irigaray, 1977] が、〈私〉というものこそ、そうした「*n* 個の性」に相応しい。しかしながら、このことを規準に議論を組み立てるとき、社会学は自らの思考から自らを解放し、〈知〉の変革を迫られることになるだろう。なぜなら、そうした社会学は、観察される「行為」を対象にするのではなく、人間が社会的存在であることを無条件に前提にするものでなく、世界の独我論的構成を規準にして議論をしていかなければならないからである⁽¹⁷⁾。

〔注〕

- (1) このことは、差別研究がいかなる差別－排除をも消去することを倫理的命題とするときに、現実の問題となる。これは、差別という現象がわれわれに提示され、差別という現象を成り立たせているのが、具体的な差別的行為である以上、そこには具体的な差別者というものを想定せざるを得ない。だから、「差別の解消」というのは、こうした「差別的行為」を道徳的に非難することを通して否定することであって、それはその「差別的行為」を行った行為者を非難し排除することに容易につながるからである。このことが差別という問題の解決を困難にするとともに、この「差別する者」に対する差別が生み出される可能性すらも排除した「差別の解消」への実践的取り組みは、「差別の解消」を目指した自らの根拠を否定するものであることにおいて、一挙に差異－差別を肯定することによって問題解決を図る可能性を増すものである。
- (2) この言説は、かつてイリイチが医療について述べた「医療は自らの存在を消去するような否定的な営みである」という言説における医療を、差別に置き替えたものである。差別研究を差別の解消を目的とするものとして、あるいは社会学を社会における何らかの問題状況（社会問題）を解決するものとして、つまりは社会の医学（社会を対象とした医学）として考えるのであるとするならば（たしかに、社会学はそうした性格も持ち合わせていると考え

ることは妥当であるだろう)、イリイチの言説に対するこの語の置き替えは比較的容易に理解されよう。傷病を治療することを目的とする医療は、その傷病が完治したときには、もはや必要とはされない。イリイチが捉えたのは、医療は「否定的営み」であるからこそ、その存在を長生きさせるためにさまざまな営みが繰り広げられ、医療が肥大化してしまい、われわれの生活世界が医療によって制圧せしめられてしまったことであった [Illich, 1976=1979]。これに対し、社会学はむしろ「否定的な営み」であることを甘受することによって、より学問的な深みを増してきたように思われる。

- (3) このことは、ときに「差別研究を行わなければ、差別はなくなる」という錯覚を生じせしめるのに十分なものとなる。差別概念が発生していないところには差別は存在しないという認識論的な真理は、一方で差別的現象の不存在という形で、「差別する側」が利用したり、他方では「差別語」の使用の禁止という形で、「差別される側」あるいは「差別の解消」を目指す側も利用したりする。

たとえば、「同和対策特別措置法」以後において、同和行政にたずさわってきた地方公務員が、法律という根拠がなくなったことによって、同和問題が存在することはできなくなり、同和行政を行うことができない（行わなくて良い）、とする思考をとる傾向があるという菱山 [2004] の指摘は、前者の例として挙げることができるだろう。この思考自体は、差別に関わる定義が存在しないならば、差別は存在しないという認識論的な真理に沿うものであるのだが、菱山はこの思考を「一般対策における工夫」によって対応できる段階とする地域改善対策協議会の意見答申によって論破している。

- (4) こうした「差別者」に対して「共犯者」となる第三者の存在は、既に佐藤 [1990] において議論されていた。
- (5) こうした差別者が日常において受けている抑圧の諸力は、フーコー (Foucault, M.) の提示した「生一権力 (bio-pouvoir)」概念に近いもののように思われる。このことはまた、フーコーの思想と仕事の展開史からいえば、「生一権力」概念それ自体がフーコーが議論の出発点としてきた「排除される側」を排除することによって成り立っているように思われるのだが、このことはまた別の機会に論じることにした。
- (6) これに対して、佐藤 [1994] の議論をもとにするならば、被差別者が、どのように自己定義をするのか、ということがらが対象から抜け落ちていってしまう。
- (7) こうしたクレーム申し立て活動の以前の「問題経験」というものに焦点をあて、これを「曖昧な生きづらさ」と表現したのは、草柳 [2004] である。
- (8) それとともに、この問題は、ウェーバー (Weber, M.) 以来の社会学の対象としての「(社会的) 行為」と「(社会的) 行為者」としての人間像に依拠することに対する疑念をわれわれに抱かせる。ウェーバーの理解社会学において、「社会的行為」の概念にはたしかに行為者の「思念された意味」が含まれていた。しかし、そうしたことがらを捨象して単純に外側から見て「行為」を定義するならば、そうした社会学的思考はある種の排除を行っていることになりはしないか
- (9) なぜ、『差別される側』の視点からの差別論』に対して、差別することの「正当性問題」を扱う「差別する側」の視点からの差別論が展開されないのか。それは、おそらく道徳的に悪い主張であるからであり、それだけでしかないからのように思われる。
- (10) でなければもちろん、差別について記述し語ることはできないのである。

- (11) 佐藤 [1994] はこうした研究プログラムの提示にとどまっており、本格的にこのことを試みてはいない。
- (12) たとえば、ジェンダー研究は、学問として成立するにしたがって、ジェンダー概念を固定化してしまう傾向を強くしたように思われる。生得的な性差に対して、文化的社会的な性差を記述することは、セックスが固定的で変更不可能なものとして置かれていた性差の概念に対して、可変性を主張するものとして同時に出現した。しかし、成立していくジェンダー研究は、そうした文化的社会的性差を、「第二の自然」として固定化することと深いかわりのもとにある。その結果として生じたものは、もとのものと表現形態は同一であり、もとのところよりは幾分はマシだけれども、結局のところ「一周してもとのところに戻ってしまった」ように見えてしまう。
- (13) ここのところの佐藤 [1994] の議論の展開は、佐藤がフェミニズムの抱えていた問題を論理的に理解したにすぎず、決して身体的（追体験的、感情移入的に）に理解していたわけではなかったことがうかがわれる。
- (14) 江原は、差別論（佐藤流に言えば「差別される側」の視点からのそれ）における「差異の否定」は、『反差別』という言説が要請される論理的構造なのであり、そもそも『差別』を『差別』として被差別者が問題設定する時に『強いられる』論理的要請なのである〔江原, 1985:76〕ことを指摘していた。
- (15) 上野は次のように言っている。
ジェンダーに限らず、差異化は必ず「われわれ」と「かれら」、「内部」と「外部」に非対称な切断線を引くことで、カテゴリー相互の間にも、またカテゴリーの内部にも、権力関係を持ち込む。したがって、政治的でないような差異化は存在しない。「差別のない区別」のような一見中立的な概念も存在しない。〔上野, 1995→2002:29〕
- (16) 佐藤は、「差別」を「差異」と関連づけて捉えることを避け、「差異」が差別の根拠であることを否定する〔佐藤, 1994:97〕。だが、そのときに引用される江原 [1985] の言説については注意が必要だ。江原は、「差異」が「差別」の根拠ではないことを主張するとき、可視的な「標識」において認知される「差異」に対して「実在的な」という形容をつけて表現し、そうした実在的な「差異」が「差別」の根拠ではないと言っていたのである〔江原, 1985:74f.〕。
- (17) 筆者は前稿〔周藤, 2003〕において、シュッツ (Schutz, A.) 解釈をもとに、社会学における独我論禁忌を廃すべきであることを宣言し、独我論に基づいた新しい社会学のあり方を模索している。本稿は、こうした社会学における独我論の位置を示す、ひとつの試みである。

〈文献〉

- Durkheim, Émile, 1893, *De la division du travail social*. = 1989, 井伊玄太郎 訳『社会分業論』（上・下）、講談社学術文庫。
- 江原由美子, 1985, 『女性解放という思想』勁草書房。
- 菱山謙二, 2004, 「特別措置法後の『同和行政』否定意見の形成状況——F市住民意識調査解析結果から」『社会学ジャーナル』29:63-84。
- Illich, Ivan, 1976, *Limits to Medicine: Medical Nemesis: The Expropriation of Health*, Calder & Boyars. = 1979, 金子嗣郎 訳『脱病院化社会——医療の限界』晶文社。

- Irigaray, Luce, 1977, *Ce sexe qui n'en est pas un*, Minuit. = 1987 棚沢直子・小野ゆり子・中嶋公子 訳『ひとつではない女の性』勁草書房.
- 北田暁大, 2001, 「〈構築されざるもの〉の権利をめぐる——歴史的構築主義と実在論」上野千鶴子 編『構築主義とは何か』:255-73, 勁草書房.
- Kitsuse, John I. & Malcolm B. Spector, 1977, *Constructing Social Problems*, Cummings Publishing.
= 1990, 村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築』マルジュ社.
- 草柳千早, 2005, 『曖昧な生きづらさ』と社会——クレイム申し立ての社会学』世界思想社.
- 佐藤 裕, 1989, 『『見下し』の理論と差別意識』『年報人間科学』10:111-127.
- , 1990, 「三者関係としての差別」『解放社会学研究』4:77-87.
- , 1994, 「『差別する側』の視点からの差別論」『ソシオロギス』18:94-105, ソシオロギス編集委員会.
- Smith, Dorothy E., 1989, "Sociological Theory: Methods of Writing Patriarchy," Ruth A. Wallance (ed.), *Feminism and Sociological Theory*, Sage.
- 周藤真也, 2003, 「アンチ・アンチ・ソリプシズム——A・シュッツと独我論をめぐる関係性から」『年報社会学論集』16: 250-260, 関東社会学会.
- 上野千鶴子, 1995, 「差異の政治学」『ジェンダーの社会学』(岩波講座現代社会学 11) 岩波書店.
→ 2002, 『差異の政治学』:3-31, 岩波書店.

※本論文は、第76回日本社会学会大会（2003年10月13日、於・中央大学）における研究報告をもとに、全面的に書き改めたものである。

(すとう しんや／早稲田大学)

Toward a Liberation of Sociological Thinking

SUTO Shinya

Waseda University

The purpose of this paper is to point out a possibility that discrimination studies will participate in discrimination and to liberate the sociological thinking for observed "social action". Therefore, in this paper, Y. Sato's paper entitled "A theory of discrimination from the insider's viewpoint" is taken up. In spite of based on the concept of insider's sociology in D. Smith's feminist theory, this Sato's paper has omitted the reality of "discriminated insiders" by standing on the viewpoint of "discriminating insiders." If based on the social action "discloser" in definition of discrimination, the problem of "the right of the not-constructing" will be rising. The theory of social inter-action makes discrimination positive. So, discrimination is considerable as a raw basic principle which cuts "I" from the world.